



たてやま

おらがんまつち

南総祭礼研究会

2023.10 No.45



館山市那古地区

宿

しゆく

自慢の地域
館山市の北部に位置する那古地区は、古来より坂東三十三観音結願寺「那古観音」の門前町として多くの人が行き交い、また江戸と房州を結ぶ物流の起点であったため地域の要衝として大いに栄えていました。なかでも那古観音交差点から東に延びる街道沿いに位置する宿地区は、旅館や料理店、薬屋、生活雑貨の商店がびっしりと軒を連ね、大変賑やかで粋な街でした。一方で街道沿いわずから数百メートルとその裏手のみという限られたエリアだったために住戸数は決して多くはありませんでしたが、昔から穏やかでまとまりのある町内でした。

現在は往時の賑わいの面影はなくなりつつありますが、総戸数三十戸余りで町内会を運営し、伝統をつないでいる自慢の地区です。



自慢の屋台

毎年七月に執り行われる那古観音祭礼に出祭する六町の中で、唯一の屋台所有地区が宿組です。

先代の屋台は「踊り屋台」と伝えられていますが、現在の屋台は「人形屋台」となっています。

屋台に施されている彫刻は、房州後藤流の後藤喜三郎橘義信の手によるものです。屋台の欄間彫刻の裏に「當國館野村國分産 彫刻師 後藤喜三郎橘義信 翁七十六大正四年

七月吉祥日」の墨書が残されています。

前方の鬼板と破風には三体の龍と「志久町」の文字の扁額。欄間には花鳥、スサノオノミコト、ヤマタノオロチ、天岩戸の天照大神、高欄八面には中国の「二十四孝」の彫刻、精巧な拵組につけられた木鼻は、珍しい趣向の「獅子と猿の二段飾り」など見応えのある彫刻があります。また、屋台制作時から奏でるお囃子が関連していたのか、房州屋台では珍しい四方を勾欄で囲まれた造りとなっています。

車輪は幅の狭い木製御所車型で、土台下から出ている梶棒は左右それぞれ九〇度以上の可動域があり、その場で屋台を三六〇度回転させることも特徴の一つです。

上から下まで後藤喜三郎の見事な彫刻がところ狭しと施された、均等の取れた美しい、どこか品格を感じさせる自慢の屋台です。

- 製作：大正4年 棟梁：地元・中村仙之助
- 彫刻：後藤喜三郎橘義信
- 形式：6本柱、唐破風箱棟軒先折上げ式屋根の房州屋台
- 人形：里見氏、他 ●泥幕：波に千鳥 ●提灯：赤地に白の卍と巴紋
- 半纏：「し」と「く」の文字をかたどった鎖模様の上に「丸に志」



獅子と猿の二段飾り



屋台屋根と懸魚を飾る龍の彫刻



里見義康、忠義の人形